

伝統技術の教材化

—表装技術を活用した授業実践にみる教育者育成の可能性について—

Making traditional techniques available as teaching materials

— The possibility of the development of educators seen in class practice where the mounting technique is utilized —

松 久 公 嗣

Koji MATSUHISA

美術教育講座

折 居 英 彦

Hidehiko ORII

大学院教育学研究科美術教育専攻

山 本 由 紀

Yuki YAMAMOTO

大学院教育学研究科美術教育専攻

(九州国際大学附属中高等学校非常勤講師)

香 月 秀 子

Hideko KATSUKI

大学院教育学研究科美術教育専攻

(福岡市立友泉中学校教諭)

(平成18年10月2日受理)

Abstract :

In this study, we search for the most effective method of acquisition of techniques and the possibility of the establishment of methodology of the development of teachers, while considering the method of orally passing down traditional techniques of “mounting” and solving problems, by verifying the process of evolution of class practice carried out mainly at junior high schools. It is possible not only to review the culture of our own country and diversify units by developing teaching materials where mounting techniques are utilized, but also to identify natural gifts of educators and construct an effective development method by verifying the process from study to development of teaching materials.

In more detail, we will carry out preparation of curricula which enable the exhibition of a number of different kinds of works in the form of a hanging picture (kakemono) and its class practice, and will substantiate curricula on the basis of obtained data. At the same time, we will verify the contents that educators and students who aim to become educators should learn in the process of solving problems abstracted during the practice and consider improvement of the method of developing educators at universities of education and its future possibility. We will verify the improvement of the curricula and the process of the development of educators with students at graduate school becoming practitioners as co-researchers and receiving evaluation as test subjects. In addition, we consider that more practical teaching materials can be made by other researchers who are currently teaching staff participating in the evaluation and searching for an improvement method suitable for their respective locations.

Key Words : traditional techniques, mounting, arts and crafts, educator promotion

はじめに

図画工作及び美術科が担う教育責務は重く、『幼稚園教育要領（平成10年12月）』の「表現」領域においては「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とあり、その文言が教科専門性の付加を受けながらも、義務教育の終着である『中学校学習指導要領（平成10年12月）』まで基礎理念として一貫して述べられている。現代社会の問題となっている青少年の「こころ」の問題と対峙するときにも、体の発育や人間関係の育成とともに中核をなす領域として認識されている。また、生涯教育においても主体的に学びを行う意志や態度を養うことで、「生きる力」を培うことの出来る重要な教科と位置づけられる。ところが、人間のこころや感性・生きる目的にまで関連する教科としての包括力は、めざましい文化の変遷や環境の変化に対応出来るものではなかった。芸術概念の拡大化にともなう表現形式の多様化に対応して、美術と関連する新領域や単元を吸収したために、消化不良に陥っているのが現状である。内容の肥大化に比例した時間数の増加は皆無で、むしろ時間数や教員数の削減が行われ、教科としての存続に危機感を抱くばかりである。ここでは、その解決策の一つとして、伝統技術の教材化を行う。伝統文化を支える卓越した技術は、機械化や電子化が進む現代の知をもってしても再現できない域にあるものが多い。その伝承に関わる、コミュニケーションシステムや指導技術を検証し、図画工作や美術教科において基本的な技術として何を学ぶべきであるかを問い直すとともに、教員に必要とされる指導力育成について方法論の確立を目指すものである。本稿では、伝統技術のなかでも「表装」に関わる技術に着目し、作品を制作レベルで終えることなく、鑑賞レベルも向上させることにより、作品への理解を深化させることを目的とする。

1. 研究テーマと役割分担

ここで詳しく述べるまでもなく、学習指導要領の変遷は、表現教科としての教科性の独立を高め、感性教育を「ものづくり」と区別して重視することとなった。現行の学習指導要領では日常に則したレベルの表現能力育成や内容の簡素化、基礎的な内容の指導重視が改善点として示されたが、ビデオ・コンピューター等の「映像メディア」や「光

等の要素が増加し、分野の統合に合わせた新たな教材研究とカリキュラム編成に係る「ゆとり」は感じられない。表現の自由性は尊ばなくてはならないことであるが、個を尊重し「過程」や「主観」を重視しすぎるあまり、「結果」や知的理解としての「美的能力」の評価が読み取れない状況を作り出してしまったのも事実である。

1. 1 基礎的能力の定義

本稿では、中学校での実践を軸に検証を行い、これからの美術教育を考えるときに、なぜ技術や知識の問題が重要な課題になり得るのかを整理していく。そこで、中学校学習指導要領において、美術科の教科目標として示される「美術の基礎的能力」について言及しておく。『中学校学習指導要領解説－美術編－』では、「美術の基礎能力を伸ばし」の解説として、「基礎的能力の伸長については従前以上に重視して指導する必要がある。」として創造的な能力育成の源と定義している。さらに、「高度な表現やことさら流行的な表現の指導になり過ぎないように」注意を促している。各内容に示されている基礎的能力は、八つの観点²にまとめられている。しかし、はっきりと技術力を定義しているのは、八つの観点のうち「基礎的技能」という表現に止まっており、そこで一般的な技術力の育成を語っているに過ぎない。この流れは、国際的な日本の立場が、西欧を中心としたものからアメリカ中心へと変遷し、芸術の理念が「自由化」する80年代半ばに定まったと考えられる。さらに、「これまでの教育がどの子にも一定程度の知識・技能を習得させることを過度に重視したこと、児童生徒や保護者に学習内容、教育課程、学校等を選択する余地を与えてこなかったことを批判」³した第16期中央教育審議会（中教審）第2次答申（1997年6月）を強く反映したものとなっている。小学校を中心とした教育の場では、基礎学力を「読み・書き・計算」能力として、反復学習の重要性を見直すなか、美術の基礎的技能を、八つの観点の一つとして扱うことに疑問を感じる。そもそも感性や創造性とはいかなるものなのか具体的に提示しないまま、その基礎を定義することは出来ない。結果として、精神的な側面を重視した抽象的な表現に止まり、各学校において教師自らの能力評価とともに、具体的な到達目標の設定が曖昧なものとなっている。創造性の育成に関しては、人格の育成と能力の育成が伴わなければならないのに、それを担うべき美術教科において、個の尊重に傾倒しすぎた技術能力育成の軽視があったこと

は問題である。こうしたことが、ジャーナリストである櫻井よしこから「……教師も生徒も「創造性」に結びつく「基礎」を欠いているからです。にもかかわらず今も「創造性」などを強調していることは、文部科学省の教育現場に対する「無知」をますます増幅させるだろうと不安にさえられます。」⁴と教育体制全体に対する批判を受ける原因ともなっている。時代や社会の求める目的が異なっていたにせよ、昭和47年に東京芸術大学の学長であった小塚新一郎が「今日の造形表現は、先きののべたように、自由性の名のもとに、特に技術指導がおろそかになっていることが反省されている。望ましい表現は、効率的で正しい技法と材料の使用選択についてじゅうぶんにわきまえていれば、機能的な表現指導が可能になる。特に学校の作業の時間は少ない。表現活動にむだなくり返しのないようにし、豊かな造形性の……(以下省略)」⁵と基礎的な技術と用具の理解の重要性を説いているが、様々なツールが必要となっている現代において、再び技術能力の学習を見直す時期にきているのではないだろうか。これらの反省をもとに、本稿では基礎的技能を基礎的能力と同義に扱い、その重要性を認識する立場から効果的な教材化について論述を進めることとした。

1. 2 伝統技術の可能性と教材化する意義

本稿では、基礎的能力の習得方法の検証を伝統技術の基礎技能習得に重ね、その伝承や教材化の過程にみるOJT⁶とOffJT⁷の関係性をあきらかにし、関連する諸問題を解決するなかで、技術習得のあり方ならびに教育者育成の方法論確立の可能性を探る。伝統技術を活用した教材開発によって、我が国の文化を見直し単元の多様性を図ることが出来るだけでなく、教材開発に至る教材研究の過程を検証する事で、教育者にとって重要な資質を見分け、効果的な育成方法を構築することが可能となる。伝統技術を有する日本古来の伝統文化は多数あるが、以下の点から「表装」という専門領域を選択することが、研究を進める上で妥当であると考えた。

- ①「切る」「貼る」「折る」「はかる」⁸「やぶる」⁹「つなぐ」「巻く」「曲げる」「組み合わせる」等の基礎的な技能を必要とし、その結果が完成に反映しやすい。
- ②「織物」「和紙」「木」「金具」「紐」「糊」等、他の伝統技術を素材として使用することが多く、広い視野で伝統を体験できる。
- ③作品を鑑賞する際、失われつつある和の空間を

意識し、茶道や華道、作法について関連づけて学ぶことができる。

- ④季節に合わせた展示に気を配るなど、日常において自然を意識する機会をつくりだせる。
- ⑤日本古来の伝統文化であり、博物館・美術館や一部の日本家屋において作品を眼にすることが多く、ある程度の理解が得られやすい。
- ⑥製作方法について知る者は少なく、既成概念にとられること無く、知識と技術の学習に取り組むことが期待出来る。
- ⑦絵画やデザインの表現領域にわたって広く作品の応用が可能である。
- ⑧工芸分野の内容を含むと同時に、紋様の歴史や日本美術史、鑑賞領域の学習を効果的に進めることが考えられる。
- ⑨本学美術教育講座に美術と書が併設されており、多様な学生による実践が可能である。
- ⑩表現領域にあっては、「日本及び諸外国の作品の独特な表現形式や構成、技法などに関心を持ち……」¹⁰とあるように、新たな表現方法の研究に繋げることが出来る。
- ⑪鑑賞領域にあっては、「日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり、それらの作品を鑑賞したりして、日本の美術や文化と伝統に対する理解と愛情を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること。」¹¹をはじめ、諸外国との相違や共通性を理解し、日本を振り返ることで、日常での活かされ方を感じとることができる。

1. 3 役割分担

本稿の分担は、中学校での授業実践に関する教材研究・実践を折居英彦¹²が担当し、実践に関する指導・評価を、授業を行う中学校の担当教員でもある山本由紀¹³が担当した。次に表装技術の可能性の探究として、学生食堂での展示作品への展開に関する表装案の提示及び製作を折居が行い、表装する作品の制作と展示に関する考察ならびに教材化にあたる効果と課題について、香月秀子¹⁴がまとめることとした。松久は本研究の企画・助言を行うとともに、四者による協議・考察の進行を担い、研究を推進した。

1. 4 発想法を取り入れたテーマの検証

本研究の独創的な手法の一つとして、民間企業が用いる教育方法を積極的に教育界に応用してその効果を計り、有効な手段のデータ蓄積を試みる。今回は、三名の研究者が被験者となって、「KJ法と刺激語法を融合した短時間でのキーワード抽

出」¹⁵を行いチャート化(図1)していくことで、研究者が所属する環境に則した教育課題の抽出を行った。その後、対立軸に挙げた長所と短所に着目してその改善策を練り、研究成果の整理に活用していくこととした。

【キーワード抽出の方法】

- ① [伝統]・[技術]・[表装] の三語から発想する単語を20以上列挙する。(各10分)
- ② 3分・6分を目安に以下の刺激語を与える。
3分：[類義語] [反対語] [イメージ] [視覚] [聴覚] [名詞] [動詞]
6分：[環境] [地方] [世代] [過去] [未来] [無関係なもの]
- ③ 挙げられた単語をラベルとして並べる。
- ④ ラベルを拡げ、セット化を図る。
- ⑤ セット毎にグループを要約した表札を作る。

作業時間を60分と予定していたが、実際は200分を要した。研究者等がKJ法等の発想法に不慣れであったことが主たる要因であるが、カツの理論¹⁶で言うところのコンセプチュアルスキルの欠如が認められる。被験者は、当然ながら各学校において特定領域の高い実務・専門知識をテクニカルスキルとして有している。しかし、同一教科に複数の担当がおらず、各種研修内容も限定されていることから、スキルアップ環境が保証されず、ヒューマンスキルの向上が図れなかったものと推測される。今後は、問題発見と的確な企画力の育成が必要であり、そのための学校環境や大学等を活用した学習環境の整備と、教育者育成プログラ

ム構築の必要性が改めて認識できた。

現職教員である研究者等への指摘を行いながらも、自らを反省したときに、教育大学のカリキュラムにおいて、こういったプログラムを導入しているものはどれほど存在するものか疑問を抱く。本年度から本学にて開講した「表装演習」¹⁷では、この解決に向けて九州国立博物館ミュージアムショップと連携し、マーケットリサーチを基にした新企画の提案を課題の一つに設定したが、十分な効果が得られるには至っていない。専門教科に関連してカリキュラムに取り入れることで、学生指導の強化を進めることが急務と考える。

三名の研究者でまとめられたチャートからは、予想外に伝統文化に対するプラス評価の高さが伺える。美術を専門とする研究者等の立場を反映しているであろう。技術欄において、基礎基本を重要視する傾向が強いなか、「つめ込み式」という単語に拒絶反応が見られる。「システム」や「マニュアル」が組織という括りのなかで評価されているが、「つめ込み式」への反発が強いのは、前述した学習指導要領の変遷に由来するものであろうか。ただし、ここではその位置付けの是非を問うのが問題でなく、長所・短所としてキーワードを挙げ、その観点に対する改善点を考察することに意義があるので、深く追求することを避け、研究者の共通意識としてまとめることの出来るキーワード選択に移ることとした。また、それぞれの改善案に対して、指導者の立場から松久がコメントを付記する。

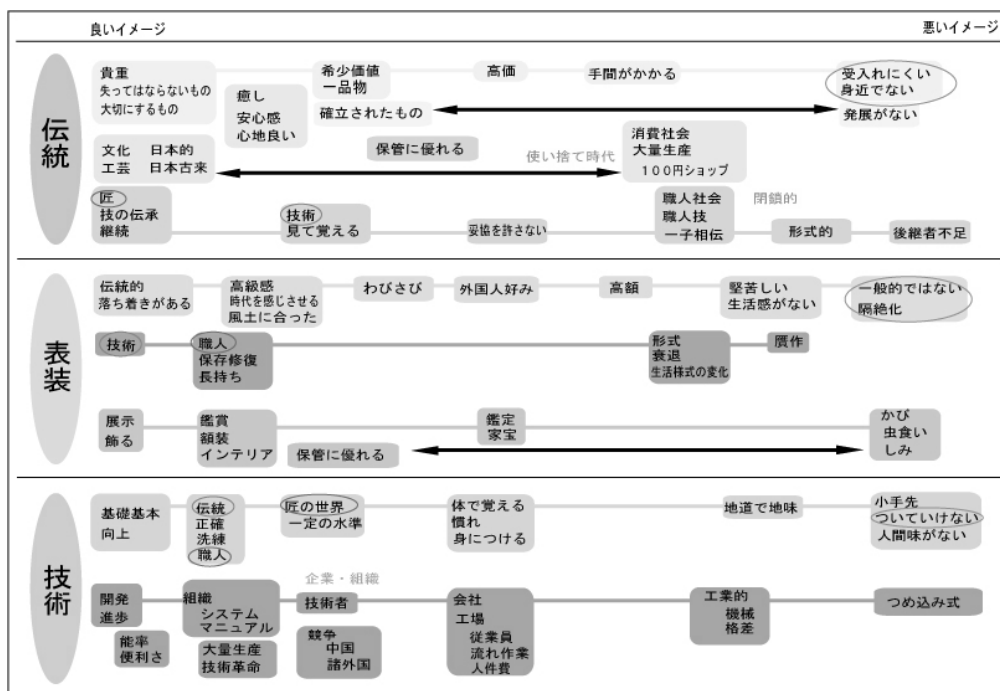


図1

■「残していきたいもの」

- ・伝統工芸に触れる機会を設け、鑑賞を行う
- ・工房見学などによって職人とふれあう
- ・別の地域の学校と協力して、土地に根ざした文化について意見交流を図る

現在、彫刻の教員とともに「体感型鑑賞教育プロジェクト」¹⁸を推進しているが、これに伝統文化を交えた計画を練る価値はある。また、教科に留まらず、総合学習や他教科との連動を可能とするカリキュラムの構築を行っていきたいと考える。

■「基礎・基本」

- ・基礎基本を重視した指導計画の作成
- ・教員育成プログラムの構築
- ・用具や専門用語に関するマニュアルの作成
- ・要点をまとめ、簡略化することも必要

中学校の教員からよく聞くことであるが、小学校においてしっかりとした用具の使用法を学習していない生徒が多いようである。造形遊びを拡大解釈せずに、素材の理解と用具の扱いについて、学習する機会を児童に与えなければいけない。指導計画の作成に関しては、中学校の三年間を通したものの他に、小中連携に通じる九年間を見据えたものであって欲しい。本来、学習指導要領を遵守することで、各発達過程に必要な感性と技能の習得が行われるはずであるが、現実はそのようになっていない。これは、教育者の能力にも問題を感じる部分であり、自己成長を強く意識したスキルアップを求めたい。

■「伝統的」

- ・歴史の授業との連携
- ・修学旅行を利用した理解の深化

歴史の授業では、文化の解説が減少傾向にあるようだ。国語（文学）や他教科においても、単元として減少傾向にある重要項目について、教科の枠を越えて連動して効果的に学習することは、難しいことなのだろうか。

■「用の美（実用性）」

- ・家庭環境での用の美を探す
- ・デザインの授業で機能性に関連して学習する

生活環境の変化を見ずして用の美は語れない。昔の生活環境を体験するなど実体験に基づいた理解と、現在の生活環境の再認識が必要である。また、流行と普遍性についても学んで欲しい。

■「失ってはならないもの」

- ・伝統工芸に関する職種紹介
- ・地域に残る伝統工芸作品の鑑賞マップ作成
- ・伝統工芸体験

伝統工芸師とのふれあいに加えて、同世代の職人

に出会える場を提供したい。若い世代の職人がどうしてこの道を選択したかを知ることは、異なった進路を選択する者にとっても有意義である。

■「癒し」

- ・保健室や心の教室に作品を展示する
- ・アートセラピー
- ・自然素材を活かした教材開発

五感を働かせて、ものに触れる体験、人とふれあう体験を増やしたい。共同作業によるコミュニケーション能力の育成にも繋げていきたい。

■「世代ギャップ」

- ・老人会や病院、地域との交流
- ・ゲストティーチャーとして職人と交流

先にも述べたように、ギャップを埋めるのは身近さを感じさせることである。各年代に継承者は存在し、より近い世代の姿を見ることも大切である。

■「生活様式の変化」

- ・現在の様式に合わせた伝統文化の応用
- ・産学連携による新しいデザインの提案

生活空間に骨董や伝統的な比率を導入し、「癒し」を求める人が増えている。今一度昔のものを見直し、良さを感じ、見立てられる感性を磨きたい。

■「二極化」

■「100円ショップ」

- ・筆やその他用具の使い心地体験
- ・お茶室等の空間を利用した授業

工業化が進み、大量生産による低コスト化や諸外国での低賃金労働の活用により、日々の生活は消費または浪費文化となりつつある。身近にあった職人技は、文化財クラスの高価なもの、機械化された安価なものに二極化している。悪とは言えない工業製品に対して、深く考える機会を作ることではか対応できないのだろうか。短時間での制作を余儀なくされた美術科授業でも、100円ショップを活用することが多いようである。絶対的に重要なものについて学ぶ機会を学校が保証できなければ、文化は失われると危惧する。

■「後継者不足」

- ・職場見学
- ・地域ネットワークの構築

「ものづくり」を美術科と切り離して考えることに筆者は疑問を感じている。単に後継者育成を重視するといっても、具体的な一歩を創る努力と継続が必要だ。ようやく、伝統文化を有する地方自治体はその保存に向けて動き出しているが、義務教育が担う責務を全うしなければいけない。手が生み出す造形のすばらしさを伝える授業の実践が、後継者の元を創造する。

2. 伝統文化の教材化における実践と応用

折居 英彦

2. 1 教材化の重要性

今回の実践は、「伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築」¹⁹のプロジェクトに参加する機会を得て、筆者が表装について学んだことに起因する。プロジェクト計画に「教材化」の項目は既に存在していたが、三年計画のうち基盤研究を終えた後に進める予定であった。しかし、研究を進めるにしたがって、表装技術を教材化する重要性を知り、美術教育界が抱えるいくつかの問題点を解決するために有効であることを確信した。そこで、予定を早め、表装技術を活かした掛け軸教材の研究と実践を進めていくこととした。教材化を進めるにあたって、より中学校の場面に則したものとなるように、現職の教員である山本、香月両名と共同で研究を行った。ここでは、それぞれに行った実践例について具体的な内容を解説し、共同研究者の評価を受けることで考察を深めていきたい。

2. 1-1 授業での作品の取り扱いについて

今まで美術の時間に作った作品を家に飾ったり大事に保管していたりする生徒は少ない。多くの生徒が破棄するか、スケッチブックの中に挟んだままや丸めて紙にしわが生じたまま放置された状態になってしまっているのが実状である。教育実習先で生徒に直接尋ね、さらに現職の先生方の話を聞く限りこの状況は改善されていない。このようなことになってしまったのは、美術の授業の中で「作品を展示する、作品を展示できるようにする」という段階までの指導を行ってこなかったのが原因ではないかと考える。多くの場合、美術の授業では感性を重視した作品制作を行うため、技術的な側面は軽視される傾向にある。しかし、多数の生徒が作品を破棄している現状からすると、どんなに時間をかけて作品を作ろうと、技術の伴わない自分の作品に対する愛着は低いといえる。さらには、いずれは捨てるとうわわっているならば、とりあえず適当に完成させればいいという考えに至り、発想し、創造するという面においても全体の制作レベルが低下するという問題も発生しかねない。自分の作品を展示出来るようにするということは、持ち帰った後に作品を自ら展示する機会を与えるとともに、作品の内容がしっかり鑑賞できることで、表現内容や技術力の程度、制作に対する熱意を反省し、客観的に見直す一つの契機に成り得る。

2. 1-2 学習指導要領の改訂

平成10年度より改訂された学習指導要領のなかで、鑑賞においては、「我が国及び諸外国の美術文化や表現の特質などについての関心や理解」「作品の見方を深める鑑賞指導」「日本の美術についても重視して扱う」との文言がある。表現においても同様に、「日本及び諸外国の作品の独特な表現形式や構成、技法などに関心をもち、自分の表現意図に合う新たな表現方法を研究する」とある。日本の伝統文化を積極的に取り込んでいくとする文言が数多く見られるようになった。その点からも掛け軸を授業で取り扱う価値は充分にある。掛け軸に対する興味・関心が深まることで、古臭いと思いつき、興味をもたなかった日本古来の絵画への興味・関心を惹くことが期待でき、充実した鑑賞に繋げることが期待できる。

また、学校生活における鑑賞の環境づくりにおいて、「校内の適切な場所に鑑賞作品などを展示する」という文言もあり、その展示に生徒作品を用いることは作品の評価にも繋げることができる。しかし、今までは学内に展示されるとしても、作品に直接画鋸を刺すことで作品に傷がつく場合が多く、作品保護の視点からも、作品の取り扱い方としても効果的であるとはいえず、見た目も悪い。そこで、作品を掛け軸に仕立てることで見た目も良くなり、そのまますぐに展示ができるため学内展示に用いることにも適しているといえる。

2. 1-3 伝統に対する意識

指導要領の改訂で日本文化、伝統文化について重視するとの項目が増えたのは確かであるが、時間数の削減された学校でどれだけ教員が取り入れることができているだろうか。専門知識を必要とし、身近に感じる事ができない状態では、生徒にその良さを享受させることは難しい。本論を進めるにあたって、筆者と香月、山本の三名は「伝統」「技術」「表装」という三つの言葉から発想するキーワードの抽出を行い、KJ法を活用して、良いイメージと悪いイメージを対立軸にチャート化を行った。良いイメージには「職人」「匠」「失ってはならないもの」等の伝統文化の技術力に敬意を表し、貴重であることを中心にまとめている。一方、悪いイメージには、伝統文化は、「一般的でない」「ついていけない」といった日常とかけ離れたものという印象が強い。「伝統」から抽出された職人社会の閉鎖性も、これを助長しているように感じた。教材化するにあたっては、この距離感をどれだけ縮められるかが求められる。

2. 2 教材化の目標と留意点

教材化していくにあたっては、以下の三点に留意して行う。

- ①表装する際に使われている伝統技術を用いていくこと。
- ②展示、巻くことに耐えうる掛け軸にすること。
- ③今まで行ってきた題材を使えること。

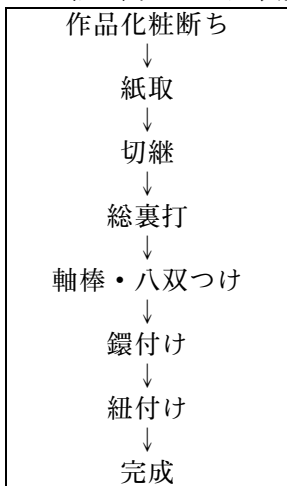
①については日頃経験できる機会の無い技術であり、なおかつ今まで時代を経て磨き上げられてきた技術であるため、教材化する際に利用していくことで、教材としての完成度は上がる。

②については、作品の保護、収納の良さ等掛け軸という形式をとる上で決して欠けてはならない「用の美」の部分である。

③については、平成10年度の学習指導要領の改訂より、美術の時間数は削減されてしまっている。それに合わせ内容の削減、簡略化を迫られている状況である。そこで、本紙の厚さと硬さ、描画材の三点のことにさえ注意すれば、今まで行ってきた題材を掛け軸に仕立てることができるように工夫する。今まで行ってきた題材の授業時間をできる限り確保した上で、実際の授業計画に取り入れてもらいたいという考えからである。また、伝統技術に対する教員側の距離感を縮める上でも効果的であるといえる。

2. 3 教材化

通常の紙による丸表具は以下の手順で制作する。



↑ 図2 完成参考作品
← 表1 丸表具制作過程

- 化粧断ち 作品を仕立てる寸法に合わせて、直角を出し、正確に裁断すること。
- 紙取 柱、天地分の紙を必要寸法に切ること。
- 切継 作品に柱、天地をのりを用いて取り付けること。

総裏打 作品と切り継いだ分全てに裏打ちをすること。

教材化するにあたって、極力本来の掛け軸の制作方法を採り入れていきたいが、クラス単位の一斉授業では、人数分の制作スペース、道具の確保が困難な状況があり、以下の内容を変更することとした。

【紙取・切継】 紙取り、切り継ぎに変わり、仕上がり寸法のサイズに裁断した台紙を用いて、位置を採寸し作品を貼り込む方法をとる。

【総裏打】 総裏については、切り継ぎを行わない分、切り継ぎによる折れ癖が出ないという点からこの作業自体を省略する。

【鑲付け】 鑲については、ヒートンを代わりに用いる。そうすることで、打ち付けるための金槌、動かないようにするためのおもりという道具不足の問題を解消できる。

今回の教材化では、作品の貼り込みが重要になってくる。状況に応じて、どの貼り込み方が本教材に用いるにふさわしいか検討していく。また、台紙に使用する紙は、色数が豊富にあり、巻くのに適しているミューズコットン(90kg)を用いる。

3. 九州国際大学附属中高等学校での実践

3. 1 実践詳細

共同研究者：山本の協力のもと、九州国際大学附属中高等学校にて、この教材の実践を行った。

【詳細】

- 対象学年 中学校3年生
- 人数 72名(A組37名, B組35名)
- 実践日程 7月4日, 11日, 18日(予備日)
- 時間 2時間
- 場所 美術室
- 使用作品 一学期に制作した木版画(18c×12cm)
- 貸出備品 カッター, カッターマット(人数分)
- はさみ

授業目標

- ・掛け軸という形式に興味を持ち、積極的に制作に取り組むことができる。〈関心・態度〉
 - ・完成の形を意識し、正確な計測・削り抜き・貼り込みができる。〈技術〉
 - ・掛け軸にすることにより、作品の見栄えの変化を感じ取ることができる。〈思考・判断〉
- 評価 以下の項目がより正確にできているかでの評価を行う。
- ・測定と印付け(数値, 直角の正確さ)
 - ・削り貫き(直角, 切り口の正確さ)

- ・貼り込み（作品の余白の正確さ、傾きの有無）
- ・軸棒と表木（取り付け方の正誤）

今回の実践に要した費用を以下に示した。ただし、紙の材質、木材の質の良否等、材料の状況によっては変動するものであることを申し添えておく。

材料名	備考	価格
台紙 (ミューズコットン)	54×19cm 1枚から8人分	25円
軸棒	21cm	25円
表棒	19cm	9円
ヒートン	1人あたり2個	22円
紐	1人あたり70cm	17円
両面テープ	1人あたり2m	10円
	合計	108円

表2



図3 今回の教材の材料費と材料一覧

3.2 貼り込み方法

貼り込み方を本来の掛け軸の形式に極力近づけようと考え、実際に存在する刳抜表具（くりぬきひょうぐ）という形式を用いた方法である。

接着剤 両面テープ(4mm幅)
貼り込み方法 台紙を作品のサイズより両面テープで貼りつけることができるよう、両面テープの幅分小さく刳抜き、作品を上から貼り込むものである。

作品使用紙 版画紙(180mm×120mm)

この貼り込み方を用いることによる利点と問題点は以下の通りである。また、貼り込みには通常糊を用いるが、作品・台紙が水気を吸うことで仕上がりに支障が出るため、今回は両面テープを使用する。

【利点】

- ・巻くことによるしわができない。
- ・見栄えが良く、反り返らない。

【問題点】

- ・台紙部分を刳抜くため、薄い本紙では、強

度に欠け、作品が破れる危険がある。

- ・大きな作品になってくると貼り込むのは難しくなり、失敗しやすい。

刳抜表具とは元々貼り込む際に、技術力を要するもので、大きな作品になるにしたがって難易度が上がる。そのため、大きな作品の仕立てには向かない。しかし、今回の作品は小品であり、中学生にも制作可能なレベルである。技術力の向上と伝統技術の体験を考えれば、導入する意味は十分にある。刳り抜きを行う理由は、全体の厚さをできるだけ均等にするためである。重ねて糊付けした部分の厚みは増すが、全体からすれば4mm程度のわずかな部分であり、影響はあまりでない。そうすることにより、作品にしわが発生しない。また、この方法で制作した掛け軸を二ヶ月間壁に掛け展示したが、作品サイズが小さいのも影響しなか特に問題は生じなかった。



図4, 5 台紙の刳り抜きと、作品の貼り込み

3.3 実践の成果と課題

実際に授業を行い、生徒の反応を見て感想を聞くことで、本教材の成果と今後の課題が明らかになってきた。当初掲げた到達目標に対する達成度は以下の通りである。

【関心・態度】 制作開始前に導入として筆者の日本画作品を本式の三段表装に仕立てた掛け軸を見せ、その後で版画を掛け軸にしたものを見せた。生徒の反応は大変良く、特に版画を掛け軸に加工したものを見せた時は「かわいい」「カッコイイ」などの声があがり、掛け軸を作っていくことに興味を持たせる事に成功したといえる。しかし、断続する三時間では、意欲を継続させることは難しかった。前時の振り返りを工夫することで意欲の継続を図れるようにしていく必要がある。

【技術面】 時間内に全員完成できたことを考えれば、十分習得し得る内容ではある。しかし、生徒間の意識の差が掛け軸のできに如実に表われている。全体指導で完成の形を明確に意識させ、個別指導で意識を高めていくような指導法を研究していく必要がある。

【思考・判断】 各自その変化を感じ取ることは

できていたが、生徒同士の作品の鑑賞する時間を設け、お互いに批評させることができれば、改めて客観的に作品を見つめ直すことができ、さらなる効果が期待できる。

【評価】 今回の場合はもともと行っていた教材（作品）に急遽付け加える形での掛け軸制作だったため、評価観点が技術的なものに片寄せた形となっている。また、掛け軸にすることによる作品の変化に注目させるために、同色、同形式にしたのもその要因となった。しかし、その分仕上がった作品を確認することによって、明瞭な評価が加えられる。

当初は授業の計画を二時間とし、予備日に鑑賞の授業を行う予定でいたが、生徒間の制作進度のばらつきが生じ、鑑賞時間を短縮し、制作に余裕をもった三時間計画に変更した。結果、進度差を埋めるための机間巡視に時間を取られ、予定していた鑑賞の時間がさらに押してしまったものの、三時間という短時間の中で生徒全員が掛け軸を完成させることができたところから、今回の制作にとっては的確な時間数であったといえる。しかし、制作進度の差が予想以上にでてしまった点から、作業説明や生徒への支援のあり方にも、改善の余地が認められた。さらに、鑑賞を十分に行うことができなかつたことから、鑑賞の時間を充実させた四時間の計画への変更も検討する。

また、当初の授業計画では、制作の随所に二人一組による共同作業を取り入れ、お互いに作業を確認することで失敗が減ることを期待していた。しかし、実際はうまく機能せず、逆に時間をとる形になってしまった。その原因としては単に共同作業の経験が少なく、不慣れな点もあるが、全体として予想以上に協力する意識が低いという現状もあった。共同作業を行うべき作業の選別、また、共同作業の必要性の説明の強化、指導の内容等、実態に合わせ改善していきたい。

最終回の授業時間を利用して、生徒に掛け軸教材に対する授業評価を行った。(資料1) 授業終了間近に短時間で授業評価を行った為に、生徒が授業内容を十分に振り返ることができず、熟慮した結果であるとはいえない。しかし、制作直後の新鮮で素直な意見であるともいえる。

⑤に関しては50%以上の生徒が良かったと答えている。理由として、「作品が良く見えた」「なかなか自分で作れるものではないから」「飾れるから」など、展示できるようにすることの必要性を生徒自身も感じ取ってくれた意見もあった。また、「自分流にできた」「自分の物ができた」と、全員

が同色、同一形式の掛け軸ながらも自分の物という愛着を作品に抱いている様子も見受けられた。良くなかつたと答えた生徒の中には、「作品が良くなかつたから」「版画をしっかりとっておけば良かった」など、掛け軸にすることによって、自分の作品制作を振り返る者も現われている。

⑥、⑦、⑧は授業進度の関係で、最後の鑑賞を行うことができず、実際に自分の作品を展示することができなかつたため、展示することの重要性を実感することがなかつたのが評価を下げることになった要因の一つであろう。しかし、⑧の掛け軸を飾りたいかという質問に対して、およそ50%程度の生徒が「飾ってもいい」、「飾りたい」と答えている。今回の実践の開始時に生徒に今まで作った作品はどうしているかと口答で尋ねたときに、およそ7、8割程度の生徒が捨てたと答えた現状から考えれば、初めての実践としては十分な成果をあげたといえる。

①「掛け軸」というものを知っているか

知っていた	5	7(83%)
名前だけ知っている	1	2(17%)
知らなかつた	0	(0%)
無記入	1	(1%)

②授業内容

面白い	5	16(23%)
	4	13(18%)
	3	29(41%)
	2	8(11%)
	1	5(7%)

③作業内容

難しい	5	2(3%)
	4	16(23%)
	3	33(46%)
	2	9(13%)
易しい	1	11(15%)

④授業時間

長い	5	16(23%)
	4	8(11%)
	3	37(53%)
	2	5(7%)
短い	1	4(6%)

⑤自分の作品を掛け軸にして良かったか

良かった	5	23(34%)
	4	11(16%)
	3	21(31%)
	2	6(12%)
良くなかつた	1	5(7%)

⑥展示できるようにする授業は必要か

必要	5	13(19%)
	4	12(18%)
	3	28(42%)
	2	8(12%)
不必要	1	6(9%)

⑦また掛け軸をつくってみたいか

作ってみたい	5	15(22%)
	4	15(22%)
	3	18(27%)
	2	9(13%)
作りたくない	1	11(16%)

⑧作った掛け軸を飾りたいか

飾りたい	5	13(19%)
	4	7(10%)
	3	19(28%)
	2	9(13%)
飾りたくない	1	20(30%)

資料1 授業評価の詳細

今後の授業実践の展開としては、以下の点を重視し、研究を深めていきたい。

- 生徒間の制作進度差への対応
- 作業説明の明瞭化
- 掛け軸の展示指導の実践とその成果
- 鑑賞に対する掛け軸制作の影響の調査

一限目の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	配時
導入	1. 実際の掛け軸と山本の作品を掛け軸にしたものを見て、今日の授業内容を確認する。	・生徒の作品への取り扱いを聞き、掛け軸を見せる。掛け軸の歴史と掛け軸にする意味を説明し、興味を惹き、活動内容に意欲をもたせる。	10
展開	2. ミューズコットの裏面に鉛筆で印を付ける。 ①軸棒・八双棒分の巻き分を測り、印を付ける。 ②巻き分を除く部分の角に作品を置き、余白を測定する。 ③縦の余白は上:下が3:2に、横は左右均等になるよう測り、印をつける。	・測り間違えてないか、引いた線が傾いていないか周りから見比べ確認させる。 ・巻き分は、表棒分は2.5cm、軸棒分は8.5cm。 ・余白の縦は25cm、横は7cm。 ・3:2は15cm:10cmになるが、軸棒の見え分を考えて、上を少し多めにし、17cm:8cmとする。横は均等に3.5cm。	15
	3. 印に沿って定規をガイドに使い両面テープを貼りつける。	・隣の者と共同で活動を行わせる。役割を確認し仕事を分担させる。 ・貼り方が間違っていないか机間巡視をしながら確認を行う。 ・間違っていた場合、両面テープをはがし、貼り直しをさせる。	20
	4. 軸棒、表棒の先を墨にしたし、乾燥させる。	・作品に墨が付かないよう列ごとに後ろから集める。 ・墨が飛び散らないよう注意を促す。	3
結び	5. 次時の内容を確認する。	・次時の内容を確認し、見通しを持たせる。	2

二限目の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	配時
導入	1. 前時を振り返り、今日の授業内容を確認する。	・前時を思い出させ、意欲を持たせる。	5
展開	2. 台紙を割り抜く。 3. 作品を印に沿って台紙に貼りつける。 ①紙の上に作品を置き、位置を確認する。 ②作品がずれないように作品を押さえながら、作品上部をめくり、両面テープで貼り付ける。 ③作品をめくりあげ、作品を定規で固定し、残り部分の両面テープのはく離紙を剥がし、少しずつ作品を貼りつける。	・失敗した参考作品をいくつか例示することで失敗しないよう意識させる。 ・貼り込みの失敗した参考作品を例示し、注意を促す。 ・貼り込む前に上下を確認させ、逆さまに貼り込まないようにする。 ・貼り込み方を前て実演を行いながら一緒に貼り込ませる。 ・貼り込むのに失敗した場合、作品の安全を考え、多少のゆがみ程度ならばやり直しをさせない。	15 10
	4. 軸棒・表木をつける。 ①ミューズコットの上下の表裏に両面テープを貼る。 ②下に軸棒をつける。 ③上に表木をつける。	・軸棒の長さは21cm、表棒は19cm。 ・軸棒・表木共に裏から貼る。 ・紙の際に極力沿わせて貼るよう板書で実演し、机間巡視を行う。 ・軸棒は左右が均等に1cm出るように鉛筆で印をつけさせる。 ・平行を確認して、軸棒を転がしながら両面テープをつける。 ・裏より貼りつけ、巻き取りながら折り目を付けていく。	15
結び	5. 次時の内容の確認をする。	・掛け軸を仕上げる事、実際の掛け軸を鑑賞することを伝え、次時の意欲を高める。	3

三限目の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	配時
導入	1. 前時を振り返り、今日の授業内容を確認する。	・掛け軸を仕上げること、実際の掛け軸に触れさせることを再度伝え、本時の意欲を高める。	5
展開	1. ヒートンをつけ、紐を通す。 ①表木に印を付け、そこにヒートンをねじ込む。 ②ヒートンに紐を通し、結ぶ。(掛け紐) ③掛け紐に巻き紐をつける。	・3:4:3の位置に取りつける理由を歴史的背景から説明する。 ・ヒートンを取りつけやすいように、釘で少し表棒に穴が空ける。 ・ヒートンをつけさせる。ねじ込むことができないものには机間巡視のおりに補助していく。 ・紐は一人当たり70cm程度に切っておく。 ・結んだ紐(掛け紐・巻き紐)はほどけないよう、テープで固定させる。	20
	2. 作品を鑑賞する。 ①作品を鑑賞する。 ②掛け軸を巻く。	・上:下を3:2に分ける理由を床の間の写真と歴史的背景と共に説明し、理解させる。 ・他の形式の作品も鑑賞する中で、自分の作品を振り返り、配ったプリントに感想を記入させる。 ・掛け軸の巻き方(紐の結び方)を、本来の掛け軸実演を通して理解させ、自分の掛け軸を自分で巻かせる。	20
結び	3. 感想プリントを完成させ、提出させる。	・プリントを書かせることで、授業を振り返らせる。	5

4. 中学校での授業実践に対する評価

山本 由紀

今回、大学院在籍者による共同研究として、表装の授業をするという取り組みを行った。綿密に組み立てられた指導案により、筆者の勤務する九州国際大学附属中等高等学校で実践することとなった。授業実践にあたり、前もって筆者も表装技術を学ぶために生徒と同じものをいくつか試作し、指導案の内容を確認した。

4. 1 総評

実践は、生徒の単色木版を表装するものであったが、定規、カッターナイフ、両面テープなどがあればよいので、現場でもすぐに対応できるものである。カッターナイフの取り扱いに関しては、危険なものを排除するよりも、安全な取り扱い方を教えることが大切だと考え、日頃から鉛筆の削り方を指導しているため、振りまわすなどの混乱はなかった。

授業を始めるにあたり、掛け軸というのを知っているかという問いに、知らないと答えた生徒はいなかったものの、「祖父母の家にあるもの」や「テレビの鑑定番組に出てくるもの」という意識しかなかった。自分たちの世代のものとはかけ離れたものという意識がうかがえる。生徒の身近な環境に浸透しているものではなく、日本の伝統技術とはいえ、生活の中で传承されているものとは言い難い。そこで日本画の掛け軸を見せたところ、「ウォー」という歓喜の声が上がった。実際に見ることで、興味関心を持ったと考えられる。そこで自分たちの版画作品を掛け軸にしてみようと作業に取りかかっていたのだが、本校の生徒にみられる傾向として、正確に測って丁寧に切り取るという作業が苦手という生徒が多い。これは表装の実践にはマイナスの要素である。実際、授業を進めていくときに、測り間違いや定規をあててカッターナイフで切ることができない生徒がでてきたため、個別に指導する時間を思いのほか費やしてしまった。二人一組の共同作業もお互いが協力するという意識が乏しく、中学生特有の微妙な友達関係のマイナス面が出てしまった。ある程度は注意し、協力を促す必要があったと思われる。また、正確に測り、丁寧に美しく切り取る重要性を生徒が理解していなかった。またやり直せばいいくらいの感覚である。定規で決められた長さを測るくらい、カッターナイフで切るくらい中学生なら出来るだろうと思っ

とがある。道具を使う練習も考える必要がある。

授業実践で感じたことは、実践者は少し早口なところがあり、説明をさらりと流すことがあったので、簡単と思われるところでも間違えてはいけないことは、ゆっくりと大きな声で繰り返すことが必要という点である。しかし、大きな見本を準備して、提示してみせた点は分かりやすかった。作業時間が予定より延びてしまい焦っていたが、これは今回のような実践を重ねていくことで解決されると考える。

最後の仕上げに紐を結びつけるところで、制作費を安くするためにサテンの紐を使用したがる、ほどけやすいという問題点があった。後日制作費に見合った表装用の紐を準備できることが確認され、この点については改善されることとなった。

4. 2 アンケート結果より

授業終了後すぐに実践者がアンケート調査をしているが、時間も短く落ち着いて出来なかったため、後日（2006年9月）筆者が改めて感想も含めたアンケートを行った。このときは美術室に作品を展示し、生徒が互いに鑑賞した後に行った。項目は以下（表3）（表4）である。

① 掛け軸づくりで難しかったところ (%)

正確に測る	29
両面テープで作品を貼る	40
両面テープで棒を巻きつける	10
カッターナイフで切る	14
金具（ヒートン）つけ	1
共同作業	1
その他	5

表3

② 家に持ち帰ってどこに飾るか (%)

和室	29
自分の部屋	26
トイレ	18
玄関	7
その他	9
飾りたくない	11

表4

簡単な調査であるが、作品を見てゆっくりと振り返ると、終了直後のアンケート結果とは少し違っている。上記の結果からわかることは、簡単な作業と思われても3～4割の生徒が難しいと思っ

かったと答えているが、これは扱い慣れていないことが原因だと考えられるので、何度かやってみればコツがつかめると考える。ただ、問題なく進めた生徒からは、もっと早く次の指示がほしかったとの意見が出ているので、生徒間の作業進度の差をうめていくためにはどうすればよいかを考える必要がある。

出来上がった作品を家のどこに飾りたいかとの質問には、「和室」と答えた生徒が3割いた。掛け軸は和室が似合うという理由である。日本的な生活環境や文化に目を向けるきっかけになったと考える。また、「自分の部屋」と答えた生徒も約3割いた。自分が作った作品を毎日見たいという意見もあった。作品を大切にする点において、収納しやすく気軽に飾ることのできる掛け軸は、利点が多い。ユニークな意見では、「トイレ」に飾りたいというものがあった。作品の大きさがちょうどよいか、家族全員が必ず見てくれるからという理由である。いずれにしても、作品に誇りと愛着を持ったと感じられた。

中学生を対象とした初めての実践であったため、授業の進め方に改善の余地が見られるが、生徒の感想としては、「掛け軸づくりが経験できてよかった」や「楽しかった」という意見が多かった。そして、実践者に対しても「ありがとう」や「これからもがんばって掛け軸づくりを教えてほしい」という肯定的な意見が大多数であった。

4. 3 教材化にあたっての問題点

この実践を通して考えたことが二つある。一つは、授業を成功させるためには、手際のよい順序を考え、生徒の行動を常に予測しなければならないということである。もちろんこれは、どの授業においても計画は必要であるが、表装の場合、大きさをまちがえて切ってしまうなど、修正のしようがない場合が多い。生徒は、掛け軸の構造もよくわかっていないし、作るのも初めての体験である。表装を何度もしている者にとっては簡単なことも、生徒にはなぜその作業が必要なのか理解出来ないかもしれないし、美しく仕上げることの大切さも伝わらないかもしれない。このくらい出来るであろうという前提ではなく、もしかしたら出来ないかもしれないという意識をもつことが授業を成功させる鍵になるのではないかと考える。同時に、できる生徒に退屈させない工夫をすることも大事である。

二つめは、表装技術を授業に取り入れるという発想は、現職の教員にとって難しいということである。

通常のカリキュラムに導入する手段やその技術をどこで学ばよいかという点である。つまり、新しい実践を行うためには、技術を学ぶ機会が必要なのである。今回の表装という実践を通して、大学との技術提携は大変有意義なことであることを実感した。もっと大学と現場とが交流を深めていけば、教師側は授業を活性化させることが出来るし、大学側は実践の回数を重ね、より教育の場に即した内容を考えることができるであろう。これは、美術という教科が生き残っていくために必要なシステムであると考えられる。

4. 4 鑑賞教育の立場から

美術の授業では、鑑賞教育にもっと力を入れるべきだという意見が強いなか、どうしても芸術家の作品を紹介するという形になりがちである。もちろん生徒同士の作品を鑑賞し合うこともあるが、その作品の見せ方にこだわる機会は残念ながらなかった。作品づくりで精一杯という授業になっていたためである。今回の表装授業では、家の中に飾るという最終的な目標を持って作品づくりを進めていくことができた。というより家に持ち帰って飾るための授業であった。出来上がった作品を通して、家族のコミュニケーションをはかってほしいし、家庭生活の中に美術を取り入れてほしい。それが鑑賞教育のもたらす大きな力であると考えられる。今回、表装を授業に取り入れることで、生活の中に伝統を生かし鑑賞する楽しみを広げることができたのは大きな成果であった。このように、作品を大切にす気持ちを育み、生活の中に美術を取り込んでいくことのできるこの実践を、新しい鑑賞教育の一環として、今後も取り組んでいきたいと考えている。



図6



図7

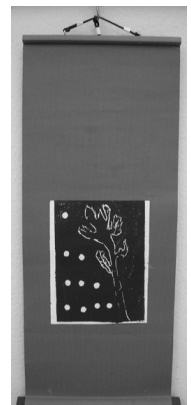


図8

生徒作品

5. 色彩要素を加味した実践

折居 英彦

5. 1 実践詳細

ここでは、展示と色彩効果による掛け軸の有用性について香月の協力のもと、検証を行った。

【詳細】

会場 福岡教育大学食堂「fiore」壁面

展示期間 7月～9月の2ヶ月

使用作品 香月制作のCG作品

作品数 16点

授業実践と異なるところは以下の点である。

- 作品サイズがA3で、作品がカラー作品である。
- 用紙が薄手のインクジェット紙である。
- 作品に合わせて香月が台紙の色を選択する。

作品、台紙ともに色彩要素が含まれ、授業実践の時と比べると各段に表現の幅が広がったといえる。評価にも色彩の項目を追加することが出来る。しかし、広がった表現により、作品の個性がでるものの、展示の際の調和に影響を及ぼす可能性も考えられる。

掛け軸の形式としては、展示空間に合わせたデザイン性を重視し、柱幅、天地幅がそれぞれ同じになるような現代的な比率を採用した。

材料名	備考	価格
台紙 (ミューズコットン)	78cm×37.5cm 1枚から2つつ分	100円
軸棒	43.5cm	100円
表棒	37.5cm	25円
ヒートン	1人あたり2個	22円
紐	1人あたり1m	17円
スプレー糊	全体に散布	50円
	合計	314円

表5

5. 2 貼り込み方法

この貼り込み方は、作品をスプレー糊で強引に台紙に貼り付けることで作品の反り返りを防ぎ、作品の見栄えを向上させることを目的としたものである。今回、急遽決まった展示会であったために制作時間数に限りがあり、削り貫きよりも短時間で仕上げることでできる貼り込み方の実験もかねて、この方法を用いた。

接着剤 スプレー糊

貼り込み方法 台紙の表より鉛筆で作品を貼りつける位置に印をつけ、スプレー糊にて作品の裏面に均一に散布する。それを印に沿って貼り込む。その後、印用の線を消す。

作品使用紙 インクジェット紙 (A3)

この貼り込み方を用いることによる利点と問

題点は以下の通りである。

【利点】

- 作品が反り返らないので、見栄えが良くなる。
- 大きな作品でも貼り込む事が可能である。

【問題点】

- スプレー糊の均一な散布ができたかどうかの判断が難しく、散布不足であると剥げてくる。
- 大きな作品の場合、一人で貼り込むことは難しい。
- 湿度の高いところでは本紙と台紙の膨張率の違いから、剥がれやすくなってしまふ。
- 巻くと細かなしわが全体的に発生する。しわを防ぐには、軸棒を太くする、太巻きを用いるなどして巻きをゆるくする他はない。

5. 3 実践の成果と課題

当初懸念していた多彩な色彩による展示の調和についてであるが、実際に展示してみると、色は異なるもののサイズ・掛け軸の形式を統一したためか、不具合は特に感じなかった。逆に掛け軸という形式が額装に比べると重厚感がない分すっきりと軽やかな印象を与え、平面的で色彩の要素の強い香月の作品に適しており、見た目にもうさくない、さわやかな展示となった。

しかし、貼り込み方法については問題が残った。作品サイズが大きい分スプレー糊の散布がまばらになり、展示期間中に数点の作品が剥がれてきてしまった。また、食堂という場所性から、調理の際に生じる熱と水蒸気の影響で、通常より湿度が高く、紙が水気を吸ってしまうことで、一時的にたわみが強く生じるという現象が起こった。乾燥すれば縮んで元に戻るため、これが作品の剥離を促進する要因となった。作品の端の部分に両面テープなどの、より接着力の強いものを用いれば剥離防止は可能であろう。まだ、研究の足りない方法であり、今後も改善していきたい。また、同じ位置に貼り込みを行ったが、印に沿って貼る際にずれが生じてしまった。この貼り込み方は貼り直しが容易でなく、一度ずれてしまうと修正が行いにくい。作品がずれないようにガイドを作成するなどして貼り込みミスを減らせるような対策が必要である。

色彩を授業に取り込んでいく場合、展示を考えて色彩効果を自分なりに選択していくようにすれば、実践的な色彩の授業になり、十分な効果が期待される。そのためにも、今後は実践できるまでの教材研究を深化させるとともに色彩に関する評価観点を明確にしていきたい。

6. 色彩要素を加味した実践に対する評価

香月 秀子

「生活に活かす色彩教育の研究」¹⁰を進めると同時に、今回大学院在籍者による共同研究として、デザイン作品を掛け軸にするという取り組みを行った。ここでは、現職教員として中学生を指導する立場から次の流れで記していきたい。

1. 作品を飾ることについて（教員の立場から）
2. デザイン作品を掛け軸にする実践
3. 教材化するにあたって

6. 1 作品を飾ることについて

作品をつくった後、それをどうするか……美術室や廊下の掲示板や教室に飾る。展示方法としては額に入れる、台紙に作品を貼る、作品をそのまま貼るなどの手法をとることが多い。

作品を飾るということは生徒の成功体験になり、達成感を味わえる。また、自分を認めてもらえたという自己肯定感につながる意味で、教育効果が高い。しかし、額は高価ということで作品に直に画鋏を刺し、飾っているところもあるが、それは先述の教育効果を低下させる。また、展示スペースは限られており、作品は丸めて持ち帰るといこととなるのが大半の状況である。通常丸められた作品を広げても元のようにならず、反り返ったり、細かい巻きじわがついたりしてしまう。そのような現状に接し、以下に関する有効な改善策を模索していた。

- A. 作品に適した展示方法はないか。
- B. 平面作品が持ち帰りやすく、良い保存状態にするにはどうしたらよいか。
- C. 家でも飾るといった気持ちになるにはどうしたらよいか。

この三点を改善する方法として、表装（掛け軸）という伝統的な技法とその取り組みに興味をもった。

6. 2 デザイン作品を掛け軸にする実践

掛け軸という日本の伝統的な表装技術は実用的であり、その伝統美は後世に残していくべきものとする。学習指導要領においても「美術文化の継承と創造への関心を高める」とあるように、学習の中にも取り入れていくべき内容である。しかしながら生活様式の変化により、家に床の間や掛け軸がある家庭というのは以前に比べると減少傾向にある。そのなかで、単に生徒に掛け軸を鑑賞させても、日本の伝統文化の重みは伝わるが、何

か遠くに感じるのが現状である。身近なものとして理解し、掛け軸のよさを生かすには、日本画のような絵画作品はもちろん、平面構成やイラストなどのデザイン的な作品と融合させることも必要なのではないだろうか。そこで、イラストと掛け軸という組み合わせで作品を完成させ、福岡教育大学の食堂に飾ることを企画した。表装の技術について学び、作品のイメージを効果的に伝える台紙の色は何か、作品がより引き立つ色は何かを考えた。これは、色の感情効果や配色の学習にもつながっていくと考える。色の感情効果や色の対比は、知識として知っていてもなかなか実際の制作の中で意識して使うことは少ない。しかし、知識を制作に繋げていくことは理解を深めることにもなり、作品への愛着を深めることにもつながる。

完成した作品を食堂に飾ると、「食堂全体が明るくなった。」「楽しい雰囲気になった。」「癒される。」という感想を学生や食堂の職員の方から聞くことができた。これは単に作品の内容だけでなく、掛け軸という和の効果も重なっているようだ。

6. 3 教材化にあたって

今回の取り組みを通して、教材化するにあたってその効果と今後の課題を挙げてみたい。

【効果】

- ①デザイン作品と掛け軸という組み合わせによって、新たな作品として生まれ変わらせることができる。（Aに対応）
- ②校内掲示がしやすく、作品に対する台紙の色の効果を考えることで明るい感じになる。（Aに対応）
- ③しわや折り目がかさずに作品を美しい状態で持ち帰ることができる。（Bに対応）
- ④額よりも軽量化が可能で、家でも飾ることができる。（B, Cに対応）
- ⑤デザイン作品と掛け軸を組み合わせることで、掛け軸という伝統文化を身近に感じることができる。（Cに対応）

【課題】

- ①巻くことを考慮すると、作品の基底材として厚手の紙は適さない。
- ②接着面が剥がれないように、接着剤及び接着方法をさらに検討しなければならない。
- ③掛け軸についての知識、制作方法を教師に伝達する機会をもたなければならない。

以上のことを十分に考えて学習を練れば、日本の伝統文化を考える新教材となるであろう。

さらに、私自身の研究テーマである「色」について考えるとすると、色の感情効果や色の対比の効果を考えながら制作ができることから、色彩学習へつなげることができると思う。

このように、多くの教育的要素を含んだ表装（掛け軸）の教材は、今後新たな展開が期待できる。



図9, 10 食堂での展示



対照色相の配色



和のイメージの配色

図11, 12 展示作品

7. まとめ

今回、新たな授業実践への試みを中心に、軽薄化する技術力の教材化とその可能性について考察を行った訳であるが、共同研究によって明らかになった教育課題は山積している。

それぞれが担当した実践毎に課せられた目的がどの程度達せられたかを反省する前に、教育大学の教員と大学院生、中学校の教員とが目的意識を一つにして、協同で研究する意義を強調しておく。山本が指摘するように、教材開発を協同で行うことによるメリットは、教員の負担軽減が目的でなく、教室で実践しなければ分からない生徒の動きや、習得能力の程度が実感できる点にある。理想的な指導案とは、各学校の各教室において、臨機応変に変更が可能でありながら、その目的にブレが生じない指導案である。基となるデータを実践結果から得ることで、応用力のある指導案の作成が可能となり、教員の資質やスキルに関係なく、的確な指導を行えるものとなりうる。次に、指導する教員のスキルを高めるための技術力育成の機会を大学が中心となって提供することが可能となる。教師のリーダーシップが求められ、教員評価の体制が整備されるなか、教員の本来的職務であるティーチングスキルの成長を学校教育がいかに保証していけるかが重要な問題となる。教育大学と各学校・教育委員会が協同で種々の問題に対峙し、個々の教員のスキルに合わせた研修及び実践機会の提供を行わなければならない。同時に、一定量マニュアル化されたプログラムを確立し、育成プログラムとして明示することで、教員のモチベーションを高め、正当な評価を受ける基盤を整備する必要がある。一定の評価が異なった学校でも通用するわけではないが、感性に頼った不確実な評価が通用する時代では無くなってきている。これらの問題解決に向けて、本研究は美術教科を中心とした教育課題を明確にし、今後の指針を得た点において成果があったと考える。

それでは、個々の事例を振り返っていきたい。まず、折居の担当した授業実践について考えるとしよう。本研究の意義は先に述べているが、その意義を十分に達してこそ、研究の評価とされるべきである。表装技術を教材化するうえで、基礎的な技術の習得を目指し、伝統素材に触れることを重視してきたが、実践者と評価者の反省にあるように、予想を超えて生徒の基礎技術力は低かった。これは、本稿の仮説に該当することでは妥当であるが、教育上は問題である。カリキュラムを作成

する場合、ある程度の反復練習の必要性を予測していたが、一定の技術力を備えている生徒とそうでない生徒の差が激しいと、一斉授業を想定している現在の美術科指導案では限界がある。当初より、机間巡視を中心に、複数の指導者によるOJTの導入を検討しているが、習熟度別授業の観点にまで踏み込まなくては解決できないものなのか、今後の実践に大きな課題を残すこととなった。筆者は、様々な個性を感じ取り認め合う感性教育が最も重視すべき問題であると考え、美術科において、いわゆる習熟度別授業の実施は避けたい。しかし、山本が指摘したように、現実に道具の扱いが未熟であった生徒に対する指導と、早く終わってしまう生徒への配慮に加え、削減されつつある限定された授業時間との関係性を考えたとき、問題は小学校での図画工作の指導内容と、小中連携のあり方にまで及ぶ。各教育委員会と学校・教員・生徒・児童・地域・大学がそれぞれ真摯に正当な評価を行い、関係性を深めて問題解決に当たることが求められる。また、作品を制作の過程においてのみ評価するのではなく、学校や家庭で飾り、コミュニケーションのきっかけにすることで、教育プラットフォーム構築に繋がる地域力強化が見込まれる。長い歴史によって弱まりつつある「生きる力」を、家庭という単位から改善し、本当の「生きる力」として学校・地域へ拡大していかねばならない。現代の生活環境に合った伝統文化の活用と理解が、その課題克服に貢献するよう、実践と考察を繰り返してさらに研究を推進していきたいと考える。まずは実践を繰り返すことで、教室で起こっている現実を正確に把握し、教育大学が果たせる役割を実行することを継続していきたい。教育にあっては、理念と理想を掲げていなければいけないが、今そこにある現実に一歩ずつ対処する努力が、問題に直面する教育者のスキルアップとモチベーション維持に繋がると信じていたい。中学校において、現実に即した基礎用語解説や基本的な用具の使い方を知る手だてを講じ、興味を持ったときにすぐ学ぶことのできる環境を整備する。これは、生徒だけでなく、教員に対しても有効である。それぞれの学校や教室で何が必要とされているかを実践授業の中で明確に指摘し、その対処法として有効なマニュアルや指導案、教材研究の資料を提供する。何が有効で、どこまで掘り下げたレベルのものが必要なのか的確に判断し、その作成を急ぎたい。恐らく小学校で使用しているものも再検討の対象とし、アレンジした上で中学校に導入することもあるだろう。

次に作品を表装することで生まれたメリットについて考察する。鑑賞に関連して、日常生活に美を求める態度を育てることが本研究の重要課題であった。これは、いつもと違う体験という新鮮さが手伝って、ある程度の反応を得たようである。しかし、教材には常にマンネリ化が問題となってくる。当然授業を受ける生徒は毎年新鮮な気持ちで教材に対する訳だが、学校を中心とした作品展示について見慣れてしまったときに、同じ反応をもって迎え入れられる教材であるかが重要である。来年になったらあんな作品が制作できると期待を持って作品制作に向かえることが出来るほどの魅力をもったものでなければいけない。その点では、折居と香月が行った色彩を加味した実践にその可能性を強く感じた。作品と表装の組み合わせにデザイン教育を交えて指導することで、個性や感性を刺激しつつ基礎を学ぶことの出来る教材開発が見込まれる。材料提供の方法と、作品となる題材設定の幅を広げること検討し、提案できる教材の数を増やしていくことが必要である。

本研究は、三年間を一定の期間として設定し、その中で教育大学の学生や現職の教員が、美術科の抱える問題にどのように対処していくことが出来るかを考察する側面も有している。一年目となる本年の試みとして、各研究者は高い成果を挙げたと考える。しかし、計画の進行上やむを得ないことではあるが、問題点が数多く抽出できた段階であり、如何に対応していくかが最も重要な課題である。子どもたちが、中学校・高等学校・大学や社会に進んでなお、生涯教育の一環として美術を愛好し、常に感性の向上と人間性の育成を考えられるような人作りに尽力していきたい。本稿に携わった研究者は皆、教育に関係する仕事を継続するだろう。大学を離れる来年度以降も大学との関わりを強化して、さらに研究の裏付けとなる実践を繰り返すことを期待したい。自身への反省を踏まえて、教育者としてのキャリア育成と良い授業作りに励まれることを望んで、本稿のまとめとしたい。

註

¹ 書画などを装飾・保存することを目的として、これらの作品を軸や額に仕立てることを総称して「表装」という。用途によっては、「経師」「装潢」「表具」等も同義として使われる。代表的な仕立てに「掛け軸」があり、「軸装」「掛物」「幅」等、扱いによって異なった呼び方をする場合がある。

² 『中学校学習指導要領解説 美術編』、文部省、1998、p.25

- ①ものの見方・感じ方を深めること
 - ②主題や発想を創出すること
 - ③考えやイメージをまとめ組み立てること
 - ④形・色・材料で表す感覚や基礎的技能を身につけること
 - ⑤創意工夫して、よりよく表すこと
 - ⑥全過程を通して自己確認すること
 - ⑦作品を通してコミュニケーションや批評をし合い、互いのよさや個性などを理解し合うこと
 - ⑧自分の作品に愛着をもち、大切にすること
- 基礎的な能力としながらも、ここでも「感性」や「発想力」,「構想力」,「表現過程での創意工夫」,「発見と確認」,「コミュニケーションと個性の理解」,「大切にすること」というように、個性をはぐくむ教育の感性部分に傾倒した基礎能力が重要視されている。

³ 重松克也,「個性をはぐくむ教育」,『最新教育キーワード137』,時事通信社,2005,p.110

⁴ 櫻井よしこ・宮川俊彦,『ゆとり教育が日本を滅ぼす』,ワック株式会社,2005,p.43

⁵ 小塚新一郎,「監修のことば」,『図解・造形美術の事典』,東陽出版株式会社,1972,p.3

⁶ 仕事を通して上司が適宜指導を行う職場内訓練をさす。伝統技術の中では、徒弟制度として認識される。清澤正,『図解ビジネス実務事典 マネジメント』,日本能率協会マネジメントセンター,2006:参照

⁷ 社外の研修プログラムやセミナーへの参加など職場外研修をさす。前掲資料『図解ビジネス実務事典 マネジメント』:参照

⁸ 「計る」・「測る」・「量る」の意を含むため、ここでは「はかる」とした。

⁹ 和紙を切断する際に、「くいさき」という独特な方法を用いる場合がある。

¹⁰ 『中学校学習指導要領(平成10年12月)』,文部省,1998

¹¹ 同上

¹² 本研究の共同研究者。福岡教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻2年に在籍。

¹³ 本研究の共同研究者。福岡教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻2年に在籍。授業実践を行った九州国際大学附属中高等学校において美術科非常勤講師として勤務する。

¹⁴ 本研究の共同研究者。福岡教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻2年に現職教員として在籍。福岡市立友泉中学校教諭。

¹⁵ 星野匡,『発想法入門』,日経文庫,2005:参照
今回の時間設定及び刺激語の選択は松久が行った。通常,KJ法でのラベル作りは長期間を想定しているが,単時間で抽出するために刺激語を与えることを考案した。3分の段階では発想を補う程度の言葉とし,6分の段階では発想の転換を促す言葉を用いた。連続して三つの要素についての発想を行ったため,前に抽出した単語が刺激語となったことは否めない。結果として関連深い単語が列挙されたが,回数を重ねる毎に発想される単語数が増加した点は利点ともとれる。今後は十分な時間を設定し,効果的な方法を模索していかねばならない。

¹⁶ 清澤正,『図解ビジネス実務事典 マネジメント』,日本能率協会マネジメントセンター,2006,p.147

¹⁷ 福岡教育大学において平成18年度より開講した科目。美術教育講座の坂井孝次教員と松久が担当する。

¹⁸ 福岡教育大学:滝 純一,池松 一隆,千本木 直行,松久が協同で進めるプロジェクト。平成16年から継続して,出前授業を中心とした感じる鑑賞教育を実践している。

¹⁹ 松久が進める科研費採択プロジェクト。詳細は付記に記載。

²⁰ 香月が福岡教育大学において進める研究課題。(平成17年度~18年度)

²¹ 葉養正明,「教育プラットフォーム」,『最新教育キーワード137』,時事通信社,2005,p.40

参考文献

- 1 湯山美治,『表装の技法』,日貿出版社,1999
- 2 『幼稚園教育要領解説』,文部省,1998
- 3 佐々有生,『図画工作・美術科教育の理論と実践』,現代教育社,2003

付記

本研究を進めるにあたり,授業実践の場を提供いただいた九州国際大学附属中高等学校に深く感謝いたします。

本研究は、科学研究費補助金：若手研究（A）採択プロジェクト「伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築」（平成18年度～20年度）において、平成18年度に行った授業実践の成果を中心にまとめたものである。